

家持が最も愛した 越中万葉の風景

天平18年(746)から満5年を越中守として在任した大伴家持にとって、心を晴らす最高の風景は布勢の水海でした。

越中国庁からも近く、気の合った仲間同士で出かけ、木ぬれ花咲き葦鴨の群がる湖岸をこぎめぐっての遊覧は、遠く家郷を離れた任地でのつれづれの慰めだったのです。

布勢の水海遊覧の歌は、万葉集に4回にわたって収載されており、水海周辺の地勢や景観が歌われているため、「多祜」「乎布」「垂姫」など、布勢の水海湖岸の地名が歌に詠まれています。「越中万葉」に歌われた地名で、最も数の多いのが、布勢の水海の地名です。

布勢の水海は、川によって運ばれた土砂と干拓によって陸地化しており、現在は氷見市十二町の「十二町漏水郷公園」にその名残をとどめるばかりです。

今回の企画展では、館蔵品を中心にして、家持たちが愛したかつての広大な布勢の水海を描いてみます。



(谷口紅雲 画)

多^た祜^この浦の
底さへにほふ
藤波も
かさして行かむ
見ぬ人のため

内蔵繩麻呂

おろそかに
我は思ひし
乎^を布^ふの浦
荒磯の巡り
見れど飽かずけり

田辺福麻呂